

「～もう一人では泣かせない～引きこもりだった三人が送る『心の授業』」事業

自らの「引きこもり」体験を語ることで
青少年に生きるためのヒントを与えるコンサートを開催

長期に亘って自宅や自室に閉じこもり、社会問題化している「引きこもり」。しかし、これまで積極的な対応方法は確立されていない。元引きこもりだった青年たちが自らの体験を語るなかで、小中高生や父兄たちに「引きこもり」から脱するためのヒントを与えるコンサート活動を行い、大きな反響を呼んでいる。

「どうして学校に行かへんの」
母親の言葉が娘を追い込んだ

2013年3月19日、東京学芸大学附属高校で「いのちのコンサート」と題された講演会Liveが行われた。ステージには滋賀県出身のバンド「ジェリービーンズ」とボーカルのyokko。ちょっと見では学園祭に招かれたバンド演奏と変わらない。

しかし、曲の合間の語りになったとき、場内の雰囲気は一変する。

「僕たちは、仲間に出会うまでずっとずっと引きこもりでした」

彼らは自分の体験を語り始めた。ボーカルでギターの中崎史朗さんとドラムスの山崎雄介さんは双子の兄弟だが、4人姉弟で3人が引きこもりという家庭だった。最初に姉が引きこもりになり、登校前になると体調が悪くなるという症状が現れた。

「どうして学校に行かへんの！」という母親の叱責が彼女を追い込み、ついに自室から出なくなりました。

「あるとき、姉が珍しくリビングに降りてきたんです。母は嬉しかったこともあって、姉に近づき、服に付いていたゴミを払おうと触れた時でした」

山崎史郎さんの語りは続く。

「『ぎゃー！』と半狂乱の声をあげて、姉は自室にこもってしまいました」。このことで、母親は娘を追い詰めているのは自分であることに気がつく。そして娘はひとりぼっちであること、いつ自ら命を絶ってもおかしくないことにも

思いが至った。

山崎さんは、自らの体験を含め引きこもりについて次のように語る。

「回りを冷静に見る余裕なんてないんですよ。ただただ苦しくて、『がんばれ！』なんて言葉はまったく耳に入りません」

山崎兄弟はそれぞれ友人関係や先生との関係などがひきがねとなって、引きこもりになったが、当時、お互いの理由は知らず、まして二人で話し合うこともなかったそうだ。

ベーシストの八田典之さんもクラスの人間関係が原因で、学校へは行けなくなった。

3人が救われたのは、山崎兄弟と八田さんの両親が引きこもりの親の会で出会ったことだった。同じ問題を抱えた同士なら理解もしあえて、よい方向に進むのではないかと考えた親たちは、子どもたちを引き合わせたのである。目論見はあたり、3人は意気投合して遊ぶようになる。

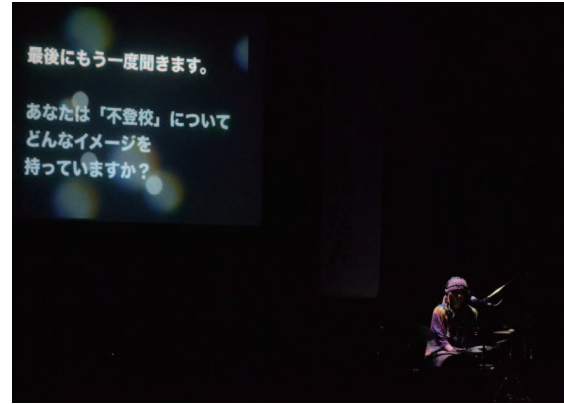
やがて音楽に目覚めた3人は「ジェリービーンズ」というバンドを作り、演奏活動を行うようになっていた。



東京学芸大学附属高校で開催した「いのちのコンサート」講演会 Live



子どもたちが親しみやすい「音楽」を通じて、自らの体験を語りかけていく



不登校を経験した彼らだからこそ、伝えられることがある

歌詞のひと文字ひと文字に
思いを込めてステージは続く

NPO法人マイペースプロジェクトの理事長・小梯康明さんは、音楽会社に勤務していた頃、ジェリービーンズと出会った。

「彼らの体験談を聞き、同じように苦しむ子どもたちにその話をすれば、大きな助けになるのではないかと考えたのです」

ちょうどある学校の関係者から依頼され、学校で演奏をすることになった。結果はすこぶるよかった。父兄や生徒たちから大反響を得た。この成功によって、ジェリービーンズの音楽活動の方向は青少年の心の救済へと向かうことになる。小梯さんは会社を辞め、NPO法人マイペースプロジェクトを作った。

この日彼らと共にボーカルを務めたyokko（田畑佳子さん）もグループの一員である。ジェリービーンズの活動を知った彼女が共感して、プロジェクトに参加するようになったのだ。ただし、彼女は引きこもりではない。むしろ高校までは優等生だった。しかし、原因不明の病に倒れ、死を覚悟したときにあることに気がつく。

「私のこれまでの人生は、両親の期待に応えることだけだった。本当に自分のやりたいことはまだやってない。このまま死んだら、悔いが残る」

命を取りとめたyokkoさんは、両親とは対立してでも、自分の好きな音楽活動をする決心をした。声が出なくな

担当者より



より多くの
子どもたちと出会うことが
できました。

NPO法人マイペースプロジェクト
理事長
小梯泰明さん

僕らの活動はまだ社会的に認知されたものではありません。でも、必要とされるなら、どこへでも手弁当で駆けつけたいと思っています。AJOSCの助成をいただき、より多くの皆さんに出会うことができました。今後は採算性を含め、持続可能なプロジェクトにしていきたいと考えています。

る病も経験した彼女は手話を覚え、今、彼女はダンスのように大きな手話を交えながら、声をはりあげるユニークなスタイルを確立している。

「引きこもりだけではなく、不良少年にも、耳の不自由な人にも僕らのメッセージを届けたいんです。結局、人間みな苦しい時はいっしょですから」と小梯さんは語る。

「誰も気付いてくれないと泣いていたのは誰?」。思いを込めた歌詞がステージ中央のスクリーンに踊る。体験者ならではの説得力がそこにある。

この日は東京での初のコンサートだった。普段は地元や四国で行っている彼らの活動を、同校の生徒が彼らの活動をネットで知り、メールで招聘したのである。アンコール曲では、観客も一体となり、笑顔と涙のエンディングになっていた。



今後は日本全国100カ所で講演会Liveを開催することを目標にしている



講演会Liveを行った学校の子供たちから届いた手紙